

アトリエ箏こだま（箏曲）



代表 児玉寛子。生田流教授。NHK 邦楽技能者育成会卒業。NHK・FM などの放送番組や福祉施設で演奏を行うほか、米海軍横須賀基地や小学校などで定期演奏会（指導）を行い多くの人々に箏の魅力を伝えられるよう活動している。国際交流行事や海外での演奏経験も豊富。現代にかなった発展的な音楽を、流派にとらわれず自由に、箏が特殊なモノではなく多くの人々を楽しませるものであるよう、箏の持つ魅力を探求している。また、28年前から複数の福祉施設で毎月6回箏ライブを行い、音楽療法リハビリを兼ね、箏演奏や短編の読みきかせを行っている。

横浜萬屋心友会・興禅寺雅楽会（庖丁式）



庖丁式とは式庖丁とも呼ばれ、食材にはいっさい手を触れずに箸と庖丁のみで魚や鳥をさばく伝統的な儀式。平安時代、その作法が確立したといわれている。今日では調理に対する心構えを磨くたしなみとして、おもに料理人の間に受け継がれている。

横浜萬屋心友会は、庖丁式を実践する四條心流会の母体。四條心流会は、明治44年に堀万吉が横浜料理人組合を結成後、四條祭として料理人の仕事始めに「新年俎板開き」を主催したことにはじまり、戦後に正式に結成された。現在、鶴岡八幡宮春季・秋季例祭での奉納など、式庖丁の技術研鑽に励む。興禅寺雅楽会は、明治27年頃、都筑郡高田村（現在の横浜市港北区）の興禅寺で発祥。修行僧が近隣に逗留していた楽人（一説には宮内庁楽部の東儀氏）に師事したのがはじまりといわれ、その後、農民とともに練習に励み、現在に至る。横浜市の民俗芸能に認定。会員20名、後継者の育成が今後の課題。

北見 翼（和妻）



「和妻」は日本の伝統的な奇術のこと。歴史は古く、奈良時代に仏教とともに伝来した「散楽」に端を発し、江戸時代から「手品」「手妻」、明治以降「和妻」と呼ばれるようになった。1997年、和妻は無形文化財に指定され、和妻師は希少な存在となっている。代表的な奇術に『水芸』『胡蝶の舞』『万倍傘』などがある。

北見翼は1990年生まれ。幼少のころから独学で奇術を学び、高校在学中に北見マキマジックスタジオに入門、マジックの基本を学ぶ。その後、北見マキに弟子入り、2009年に落語芸術協会の前座として楽屋入り。2010年に日本手品「養老派」の家元である北見マキより和妻を継承。日本舞踊（宗山流）、三味線などの伝統芸能の習得にも励み、2011年に和妻師としてデビュー。現在は寄席の色物芸人として都内各寄席に出演中。

ブログ：『和妻師・北見翼ブログ』 <http://ameblo.jp/tsubasa-magic/>